

## アーニョロ・ブロンズイーノの肖像画における仮面性についての一考察

瀬戸はるか (東北大学)

---

16世紀フィレンツェで活動した画家アーニョロ・ブロンズイーノ(1503-72)の肖像画に描かれた人物は、肌の滑らかな表面処理が大理石や陶器のような印象を与え、抑制された感情表現とあいまって「仮面」のようだと評されてきた。こうした人物描写の要因として、従来はカスティリオーネの『宮廷人』(1528)に記されている理想的な宮廷人のイメージの影響や、権力者にふさわしいイメージを観者に示す必要性といった説明がなされてきた。それに加えてC. マッココーコデール(1981)は、当時フィレンツェで流行していた演劇や仮装行列の影響を指摘している。演劇の中の誇張された身振りが肖像画の人物表現に影響を与えたというのである。

だが、現代においてブロンズイーノの描く人物が「大理石」や「仮面」のようであると形容される時、そこには描かれた人物が現実の人間とは異なる「不自然な」表現であるというニュアンスが含まれている。しかしこのような印象は、歴史的というよりも、現代的な一種のアナクロニズム的批評であり、ブロンズイーノの描く人物像の本質を捉えるものではない。事実、この画家の同時代人であるヴァザーリは、ブロンズイーノの描く人物が仮面のようなところか「実物そっくりで、まるで生きているかの如く描かれている」(『芸術家列伝』、1568)と称賛しているのである。

本発表では、マッココーコデールの指摘をさらに推し進め、当時の人々の感性を考察に含むことでブロンズイーノの描く人物像を再検討する。確かに、ブロンズイーノの人物像は、理想的な宮廷人のイメージを装うという点では「仮面」を身につけている。だがそれは当時としては何ら不自然なものではなく、『宮廷人』にも記されている通り、むしろあるべき姿だった。さらに考慮すべきは当時の人々がしばしば目にしていた様々な祝祭に際しての仮装行列や喜劇、幕間狂言であろう。ブルクハルトも述べるように、この頃の仮装行列では人間の俳優と等身大の着衣像が並置され、俳優が彫像を装ったのちに、歌ったり朗唱したりして生きた人間であることを示したという。さらに、この頃の様々な演劇では、登場人物は人工的で、その動きは人形のように誇張されていた。当時の鑑賞者はこのような視覚体験になじんでいたために、仮面のような人物像に不自然さを感じなかったのではないか。ブロンズイーノの人物像を、当時の鑑賞者のまなざしから再評価することを試みたい。